

「防災庁」に期待すること 矢守克也（京都大学防災研究所・教授）

I. 理念・哲学：「本気の事前防災」 →詳しくは、別稿『私が考える「本気」の事前防災』を参照

- (1) 「ビフォーX」：徹底した「事前」の意識をもって、つまり、今口にしていないことは「アフターX」では決して発言しないとの覚悟をもって、「ビフォーX」の今、防災について語り構想し行動すること。
- (2) 「考えるのもおぞましいこと」：たとえば「だれ一人取り残さない」を貫徹できない状況や、「有事」との同時発生、原発事故などについて、事後つまりそれが起きてからではなく、事前の今語り構想し行動すること。
- (3) 「命を守ることの困難」：普及・啓発においては、命を守るためのノウハウ（だけ）でなく、命を守ることの困難（割り切れなさ）を伝えること、また、教えるのではなく、市民が自ら考え決断し行動する仕掛けを。

II. 「3つの防災」の区別とプライオリティの決断 →次ページの図を参照

一口に「防災」と言っても、毛色の違う「3つの防災」が混在して進行中。「防災1」：数千人の犠牲者を百人オーダーにする防災（当然ではない、危機が迫る）、「防災2」：数百人をゼロに近づける防災（口先だけでゼロを諦めている？）、「防災3」：数万人を絶対に出さない防災（これまで通りの「後追い検証」ではダメだ）。これらが別々の施策として別の省庁（部局）で展開。「防災庁」は優先度を決断すべき（相互調整ではなく）。

III. 総合地域施策としての「事前防災」の司令塔役

事前防災にも司令塔機能は必要。事前防災は本気になればなるほど、逆に「防災オンリーマター」ではなくなり、「総合地域政策」となる。そのための構想力と舵取り役を防災庁には期待したい。以下は一例。

- (1) 「防災×健康」（～厚労省）：「動けるからだが一番の防災グッズ」（高知県四万十町）。高齢化100%でも住民全員が歩ければ、理論上、避難行動要支援者はゼロ。個別避難計画に代表される「防災×福祉」のコラボをさらに前進させた「防災×健康」で「ふだんとまさかの二刀流」を追求。
- (2) 「防災×観光」（～国交省・経産省）：「防災ツーリズム」。日本一高い避難タワーを中心にした日本一の防災で日本一のまちづくり（高知県黒潮町）。災害に備える以前に過疎化・人口減、地場産業の衰退といった「現在の課題が先」の声に答える防災でない実効性なし。地域活性化×防災で「ふだんとまさかの二刀流」。
- (3) 「防災×環境」（～環境省）。「防災×脱炭素×福祉：地域マイクログリッド構想」（高知県黒潮町）。エネルギーの面で「自立」することで、そもそも「孤立」が問題にならない自治体（コミュニティ）を作る構想。導入したEVを弱体化する域内交通問題対策に使うなど、ここでも「ふだんとまさかの二刀流」を志向。

IV. 災害関連連対策：『孤立・途絶』から『自立・独立』へ（本日のテーマ）

- (1) 「防災地域自立圏」の形成：「孤立・途絶したらどうするか？」ではなく、「自己完結しているので、孤立・途絶は最初から問題にならない」を目指す→上記Ⅲの「防災×環境」など「ふだんとまさかの二刀流」
- (2) 「ネットワーク」（つながり、外部支援）から、「スタンドアロン」（自己完結、内部充足）のための技術開発と普及定着を（マイクログリッド、ポータブル水再生システム、自己完結型の循環式水洗トイレなど）

【参考図】3つの防災：基本的な成功と、例外的なしかし深刻な失敗

